

「できる人」の見分け方・育て方（2）

周りを見て行動する

前回のこのメルマガのコーナーで、「よくできる人」は「周囲の状況を分析しながら自身自身の行動の仕方を判断している」ということについて述べました。今回はその続編です。

実は、このように「周りを見てどうすべきか考える」という行動の基礎にある、「他人の真似」は、人間のあらゆる学習の基礎にあるポイントです。

学ぶことは真似すること

学習のことは和語で「学ぶ」といいますね。この学ぶという言葉の語源は、一説では「真似をする」という意味の「まねぶ」から来ていると言われています。学習することとは、人から教えを受けて知識が技芸を身につけること、勉強や学問をすることを指していますが、それは他人（先生）の真似をすることから始まるということ、この語源の由来は示しています。

自分の周りに居る先生の真似ができない人は、そもそも“学び”をすることができない人なのです。

猿真似は駄目？

もちろん、自分なりの何の考えもなく単に他人の真似だけをしているのではいけないのですが、それは人間の発達より高度な段階にさしかかってからのお話です。

人間が学習するいちばんベースには、先生を真似するところから始まるということ、まずは確認しておく必要があると思います。

幼少期の環境で決まる

では、こうした“真似”のできる人材を、どうやって育成すればいいのでしょうか。

実は、真似ができる（他人から学び取る姿勢がある）かどうかは、幼少期にその人がどのような環境で育てられ、精神的に成長できたかが大きく関与しているので、会社に入ってからでは残念ながら手遅れ状態です。

・・・ただし、会社に入社してからでも、人間を大きく変化させるのは難しいのですが、ある程度の訓練は可能です。

文章を書くこと

最も有効な訓練は、「文章を書く」ことです。何かテーマを与え、適切な文字数（例えば600字）を設定して、文章を書いてもらうのです。なぜ文章を書くと「できる人」になるか、疑問に思われる方も居られるでしょうが、実は「文章を書く」ということは、その人の知

的側面の全てがわかる、能力ある人材か無能者かを見極める最も有効な手段であると、古くからいわれています。

知的活動の凝縮

文章には、大げさに言えば人間の知的活動の全てが凝縮されています。まず論理力がないと文章が構成できません。あることを説明しようとする時に、その前に何を言っておかないといけないとか、これとこれの間にはこのことを説明しておいた方が話の繋がりがよくなるはずだとか、こういったロジック（論理）を練らないと、まとまった量の文章はまず書くことができないのです。

できない人の文章

あまり考えた経験がない人の書いた文章は、単なる知識のひけらかしや羅列であったり、用語の選択がまずかったりと、さまざまところに問題がすぐ露呈します。そして何よりも、「できない人」の文章は、何を伝えようとしているのかの意味がわからないことが多いです。

文章を書くことで勉強量や知識の多寡も判断できますが、それ以上に、文章には知性や構想力、人間性などといった、人間が人生を生きていくうえで必要となるあらゆる要素が含まれているのです。

論述試験の効用

ですから、昔の大学の試験では、「〇〇について、あなたの知る限りのことを論じなさい」という形式での出題が多く見られました。昨今では、大学でこういった形式で出題すると何を書いてよいかわからない学生が多いようで、あまりこうした出題はしなくなったようですが、この出題形式は、実は最も「できる人」と「できない人」の差がつく（能力差を見極めやすい）問題なのです。思考能力を鍛えようとしている諸外国では、小学校の試験ですらこうした論述形式で出題されると聞きます。

文章の書けない人に「できる人」は居ません。この点は実業界ではあまり知られていないかも知れませんが、人の能力の見極めや育成に有益なはずで

株式会社インソース <http://www.insource.co.jp/>

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5 階

TEL : 03-5259-0070 FAX : 03-5259-0075